

新撰
香川習字帖
松石書
下

K220.72
27
3

K220.72

27

3

新撰

香川習字帖

仙客來遊雲外巔
神龍栖老洞中淵

雪如紈素煙如柄
白扇倒懸東海天

鞭聲肅之夜渡河
曉見千兵擁大牙

遺恨十年磨一劍
流星光底逸長蛇

ナイアガラ瀑布は世界
中の最大なる瀑布にして
雄偉壯快遙ふ人の意表に

出で白虹飛龍の比喻もそ
れ真景の萬分一を形容
すること能はざるなり

至德洽乾坤清化朗嘉辰
四海既無為九域正清淳

元首壽千歲股肱頌三春
優游沐恩者誰不仰芳塵

霜威收水語夜色壓燈花
喜汝雙鞋道尋吾獨樹家

詩思老益退酒味寒方加
問字無多暇何辭到曉鴉

それ美術の上乗なるものは
能く民衆の情趣風尚を
導きて崇高純潔な域に

臻らしめ得べく又百般の
工藝の美術に指導に依りて
其製作の品位を高め得べし

あだにすぎ守なけふの目を
今日は再びかへり来す
むたふ暮すふふのとりを
今年にまたよめどり来す

たゞ時の間如日影たふ
惜みし人もあるものを
まふびの庭につとふ子よ
焼ますつめやをへ草

謹啟相啟為翰

貴書拜讀披見

多是清福勇健

菱架似燕清光

無子安忘休神

依輕傳之承志

協議照會附件

事情近況彙上

有獨訪公來意

起言親切第謝

感銘造憾殊念

曾向紹介面会

缺禮寬大容之如

高謙為命者說

風兮世評之見

奕係聯綴華望

所志亦復物本

參考元覽後學

委細面唾可仕以

中三ノ十七

大略如新三書座

不取教道通志中只

勿之敬也故首

来る十日より修学旅行
として日光足尾方面へ出

費二十五日物校の豫定に
少座の右道を通る

月。

學之助

父上様

舌中紙の雜記帳四冊購
求め幸便とて送付した

ふむ妹へも二冊送分與
あつるべし哉

兄より

愛次郎殿

研究会の像を付函面議
仕りたふ留録手あごら

今夕五時頃より拙宅へ
遊居勞下されたるを

月日

竹村

松聖見

中三十三

謹啓休業中の者題
こたなど漸く記述を了し

新刊杜撰古今存心入道也
此一境未信以勿以欺首

全明印

自
文雄生

蒼桑先生
函丈

天朝の命為一命を抛ち上を再
お顔の像い無覚束第一と運

強之ゆが采幣を採て拜顔可
仕の峰を正名公行を以て天の坂

世ふ鄙名を輝し心を以て世覺
衣被下是まぐ年來我倦ふ

孝の罪を山と名ふるを此後
権様実効可なりと境を

洋字ばかりなして和を遣いぬ人の
名と片假名にて書ふは又おどろ

是を和書ばかり見て洋籍を
見ぬ人のおどろの拙書もあはれ

十等廿おはまづいふよにあはる可き
名付くはまはるおはまのまはる

唐傳の福を享するふあらざれば
あらぬよきと申傳あるはまはる

蓮生法師

いっかどおぬもあぬははの
阿き日よりそそ喜みみえられ

藤原時盛

おとよはに侍者まゝいさゝか育哉
古の記もまた心のまゝに

源宗景

秋夜もあきと見えぬわが世は
と志のそや若のふら舞

平光幹

吉野山をより及のさし
けふなほむしと岩れたる雪

2020.7

松石香川傳書



明治三十九年十二月六日印刷
明治三十九年十二月九日發行

著作
所權
有作

發行所

新撰香川習字帖 上中下各定價金廿六錢

書者
著作兼發行者

香川熊藏
東京市神田區裏神保町一番地

發行所
印刷者

龜井鼎三
東京市神田區裏神保町三丁目

東京市神田區
神保町一番地
千葉縣千葉町

三省堂
多田屋支店
東京市神田區三崎河岸第十二號地

